

コールマイン未来構想II うつし、うつり、たちあがるもの



大洲大作《光のシークエンス-筑豊》より 船尾駅-田川後藤寺駅 2024年

展覧会名称：コールマイン未来構想II うつし、うつり、たちあがるもの

会期：2025年12月7日（日）～2026年2月1日（日）

開館時間：9:30 - 17:30（入館は17:00まで）

休館日：月曜日（ただし1月12日（月・祝）は開館し、1月13日（火）は休館）、年末年始（12月29日～1月3日）

観覧料：一般 800円(700円)、高大生 400円(300円)、小中生 200円(100円)

*未就学児無料 *土曜日は高校生以下無料

*（ ）内は20名以上の団体および田川市在住者〔要身分証明書〕の料金

*身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介助者1名無料

主催：田川市美術館、コールマイン未来構想展実行委員会

共催：田川市立図書館

協力：飯塚市筑前茜染協議会、一般社団法人菊畑茂久馬美術青家協会、鞍手町歴史民俗博物館、作兵衛（作たん）事務所、田川市石炭・歴史博物館、東京大学東洋文化研究所真鍋研究室、NPO法人汽車倶楽部、美学校、火種工房、広川事務所、株式会社モンタージュ、ポレポレタイムス社

助成：ふくおか県芸術文化祭助成事業

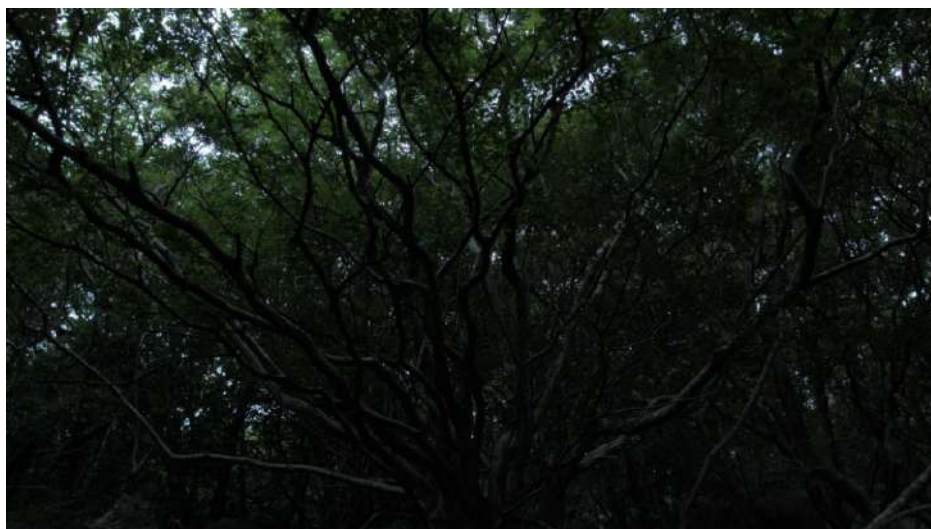
協賛：九州産業大学、株式会社JR博多シティ、FM FUKUOKA

後援：朝日新聞社、西日本新聞社、毎日新聞社、読売新聞社、RKB毎日放送、FBS福岡放送、KBC、テレQ、テレビ西日本、CROSS FM、LOVE FM、九州旅客鉄道株式会社、西日本鉄道株式会社

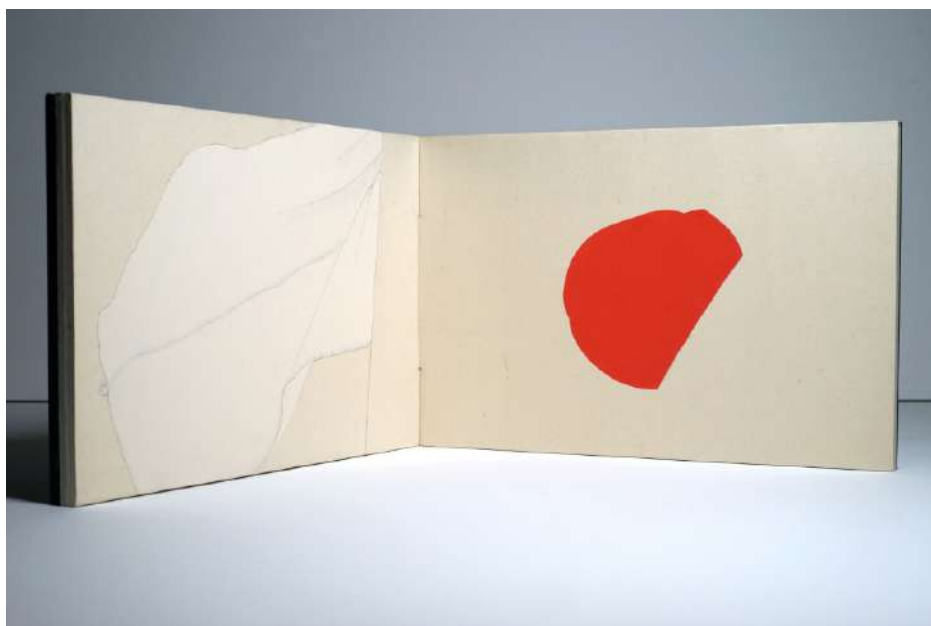


1950年代からの筑豊をめぐる表現を、現在の視点で読み解く——

本展では、異なる時代の媒介者たちが一堂に会し、筑豊という土地に目を向けます。
筑豊は、訪れる表現者たちに「なにを写し、なにを描き、なにを伝えるべきか」を問いかけてきました。その問いはやがて、表現の手法や題材にとどまらず、「絵とはなにか」「表現者とはなにか」という根源的な問いへとつながっていきます。
1950年代、富山妙子は鉱山に関心を寄せて筑豊を訪れ、人々を取材するなかで、表現しきれないほど複雑な現実を目の当たりにしました。1960年代になると、永末十四雄や上野英信、菊畑茂久馬が山本作兵衛に出会い、その功績を世に広めようと奔走します。なかでも上野と菊畑は、模写が記録を残す有効な手段であることに気づき、その方法をとおして後世に伝えるべき作品を見出しました。
半世紀を経た現在、初公開となる素描や手紙からは、表現者たちの結びつきが鮮やかに浮かび上がります。
また、筑豊のこれまでの歩みに着想を得て、現代の作家たちが身を置き、対話を重ねるなかで生み出された表現も紹介します。
音楽、映像、写真、模写、素描といった多様な表現が織りなす物語をとおして、姿や形を変えながらも繰り返す「うつされてきた」筑豊の歩みを、ご覧いただければ幸いです。



山内光枝 + 笹久保伸 《底のない水 | Bottomless Serpent》2022年



中尾美園 《紅と白（仮題）》2025年

展示構成

1. 越境のアーティスト 富山妙子

自由美術家協会で作品を発表していた富山妙子が鉱山へ足を踏み入れたのは1953年、三井鉱山での企業整備反対闘争で組合側が勝利した日でした。

その後、富山は、九州各地の炭鉱を訪れます。現地で目にした過酷な現実「絵で表現するには複雑すぎる」と感じた富山は、その体験を文章に記し、のちに書籍として発表します。

富山は上野英信が1964年に設立した筑豊文庫にも足を運んでいました。

炭鉱を巡るなかで描かれた素描のほか、上野英信や本橋成一、山口勲との交流を示す写真や手紙などの貴重な資料を通して、筑豊における人びとのつながりを紹介します。

2. 菊畑茂久馬と山本作兵衛

1964年、菊畑茂久馬は上野英信の招きで山本作兵衛のスケッチブック目に見します。

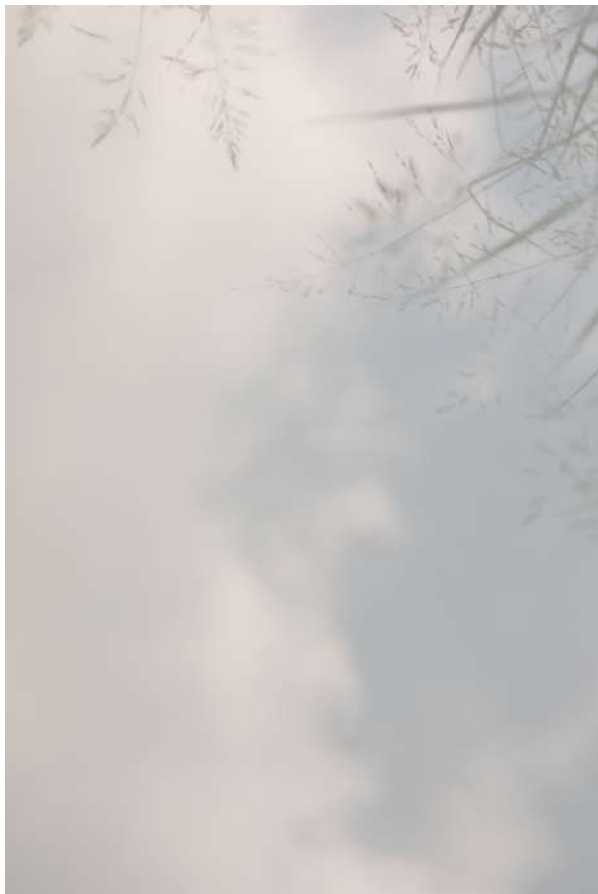
菊畑はその絵に美術的な価値を見出し、1969年には美学校の授業で作兵衛作品の模写を行いました。

日々の労働を通じて独学で描き続けた作兵衛の姿は、「絵を描くということの中に、これほど豊潤な人間への愛と、強くたくましい不屈の精神を示した」として、菊畑に大きな励ましを与えました（『作兵衛翁江戸日記』『菊畑茂久馬著作集2』1993年）。

3. 現在の視点：うつり、たちあがるもの

本展で示す「うつす」という行為は、現実を写し取るだけでなく、かつてこの地を歩いた人々が思いをつないできた、その記録と継承の営みとしても捉えられます。写真や映像、模写などを通して作家たちが見出す筑豊の姿は、私たちが日常のなかで見ている景色や記憶を、異なる視点から浮かび上がらせます。

これらの作品は、現実をとらえた表現であると同時に、作家と観る者双方の感情や記憶を呼び起こす媒材であるともいえます。



大洲大作 《flow / float - 泌川 鹿場橋付近#2》2025年



富山妙子 《炭鉱でのドーイング：1950年代》 個人蔵 ©Tomiyama TAEKO



「山本作兵衛作品模写壁画制作の様子」1970年 四谷美学校スタジオ 今泉省彦氏提供

本展のみどころ

1. 芸術家同士の交流を伝える貴重な資料の展示

上野英信の活動拠点である筑豊文庫を中心に、富山妙子をはじめ、本橋成一、広川泰士、山口勲ら、多くの芸術家たちが交わった軌跡を、手紙や共同制作作品、書籍の原稿など、貴重な資料とともに紹介します。

また、全国展開している企画「LINKS—菊畑茂久馬」に関連し、菊畑茂久馬が美学校で指導していた頃の写真や、授業構想を綴った手紙も公開。充実した資料群からは、時代を越えた芸術家たちの交流と創作の足跡が鮮やかに浮かび上がります。

2. 地域の産業に根ざした新作を初公開

本展にあわせて、地域の風土や産業を取材し、新たに制作された作品を展示します。鉄道の車窓から見られる景色、河川や山の表情、伝統産業の営みなど、地域の人々にとって馴染み深い日常の風景が、現在の視点によって読み解かれます。

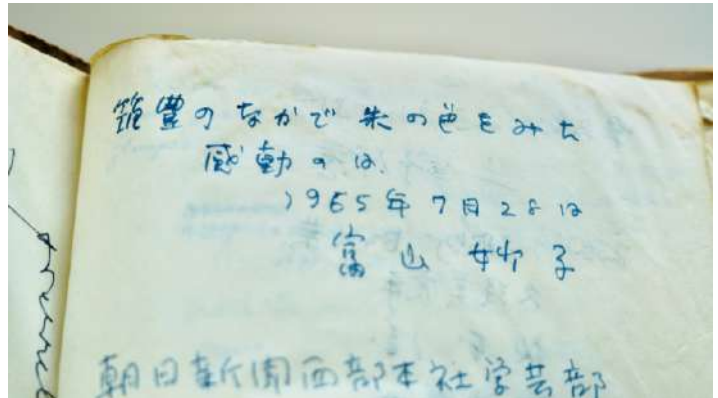
サテライト会場では、作家とともに地域をめぐるフィールドワークを開催し、実際の場所を訪れるなかで、私たちが暮らす土地を過去から現在までの視点で見つめ直すきっかけを提示します。

3. 書籍出版を記念した充実のイベント

ポストコロニアル／フェミニズムの視点から世界に発信を続けたアーティスト、富山妙子の初の入門書である、『越境のアーティスト 富山妙子』の出版を記念し、東京大学東洋文化研究所真鍋研究室のご協力をいただき、連続出張講座を開催します。

富山妙子が制作した2本のドキュメンタリー映画、『自由光州—1980年5月—』『はじけ鳳仙花—わが筑豊わが朝鮮—』の上映に加え、第一線で活躍する研究者たちによる講演会も実施。

地域と画家、そして芸術の新たな関係性を、多角的な視点から読み解きます。



「王塚古墳見学者名簿(1948年～1965年)」2021年6月 撮影者：金利明 王塚装飾古墳館蔵



山口勲《水浸しの炭住街》1959年 日炭高松

作家略歴

大洲大作（おおず だいさく）

うつる／うつすことを主題とし、写真を軸に、人の営みを光と影で捉えなおす行為を続けている。主な作品に《光のシークエンス》《flow / float》《Loop Line》がある。近年の展示に「岡本太郎現代芸術賞展」（川崎市岡本太郎美術館、2023年）、「大洲大作 未完の螺旋」（旧博物館動物園駅、2019年）、「めがねと旅する美術展」（青森県立美術館ほか、2018年）、「さいたまトリエンナーレ2016」など。2026年春、東京都武蔵野市立吉祥寺美術館にて個展を開催予定。

菊畑茂久馬（きくはた もくま）

1935年、長崎市生まれ。56年に第24回独立美術展に入選し、57年から62年まで前衛美術家集団「九州派」に参加、58年には「第10回読売アンデパンダン展」（東京都美術館）に出品するなど、60年代初頭にかけて「反芸術」の潮流で中心的な動きを見せる。1964年には南画廊で材木を支持体にエナメル塗料でルーレットの盤面とした「ルーレット」シリーズを発表した。

その後、一度は美術界から身を引くが、19年を経た83年、大作絵画シリーズ「天動説」を発表。以降は「月光」「月宮」「海道」「海 暖流・寒流」「舟歌」「天河」「春風」といった、絵画の連作を制作してきた。

また、ユネスコ記憶遺産の登録を受けた筑豊の炭鉱画家・山本作兵衛や、藤田嗣治をはじめとする戦争画など、近代日本の歴史と絵画の関わりについても論考を続け、「フジタよ眠れ 絵描きと戦争」（1978、葦書房）や『天皇の美術－近代思想と戦争画』（1978、フィルムアート社）といった著作も残している。

黒田征太郎（くろだ せいたろう）

1939年、大阪生まれ。戦後、船員として航行する合間に絵に興味を持ち、1969年に長友啓典とデザイン事務所K2を設立。1992年、ニューヨークにアトリエを構え、2009年に拠点を北九州市門司区に移すまで、世界中で様々な活動を行ってきた。渡米先で出会った野坂昭如の『戦争童話集』によって、1990年代以降から戦争のテーマと向き合うようになり、絵本をはじめ絵画の大作や壁画制作、1000回を超えるライブペインティングを通して、いのちの大切さを伝える表現活動が続いている。2025年9月には北九州市立美術館で大規模な個展が開催された。

富山妙子（とみやま たえこ）

1921年、神戸市生まれ。大連とハルビンで育ち、戦後は軍事政権下の韓国の民主化運動、炭鉱の問題や慰安婦問題をはじめとした日本の植民地支配と戦争責任、東日本大震災以降は原発問題など、政治的主題の絵画や著作を数多く発表した。扱うテーマ性から日本画壇からは黙殺され、78年には韓国入国禁止となるも、95年には第1回光州ビエンナーレ国際展に特別出品。韓国の民主化運動に貢献したとして2021年韓国政府より大韓民国国民褒章を受ける。同年、99歳没。

中尾美園（なかお みえん）

2006年に京都市立芸術大学大学院美術研究科保存修復専攻を修了。仏画や水墨画の絵師としての活動とともに、東洋絵画における写生・模写の技術をベースに、消失した絵画や、変化しつつある伝統や慣習を丹念に調査し「うつす」作品を制作している。

近年の主な展示として、「エトランゼのまなざし、不確かなおもしろ」（Gallery PARC／京都、2025年）、「こまぎれの色とりたち」（ギャラリー揺／京都、2024年）、「ある家の図譜」（なら歴史芸術文化村／奈良、2022年）など個展を開催。

「日本国憲法展」（無人島プロダクション／東京、2024年）、「Idemitsu Art Award アーティスト・セレクション」（国立新美術館、2022年）、「ボイスオーバー 回って遊ぶ声」（滋賀県立美術館、2021年）への出品のほか、「なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業」（天理、2022年）など滞在制作も行う。

広川泰士（ひろかわ たいし）

1950年、神奈川県。1974年よりフォトグラファーとして活動を始め、世界各都市での個展、美術展への招待出展多数。講談社出版文化賞、ニューヨークADC賞、文部科学大臣賞、経済産業大臣賞、日本映画テレビ技術協会撮影技術賞、A.C.C.最優秀撮影賞、他受賞。サンフランシスコ近代美術館、フランス国立図書館、東京都写真美術館、神戸ファッション美術館他で作品が収蔵されている。2015年より東京工芸大学大学院教授。

本橋成一（もとはし せいいち）

1940年、東京・東中野生まれ。1960年代から市井の人々の姿を写真と映画で記録してきた写真家・映画監督。1968年「炭鉱〈ヤマ〉」で第5回太陽賞受賞。以後、サーカス、上野駅、築地魚河岸などに通い、作品を発表。写真集「ナージャの村」で第17回土門拳賞、映画「アレクセイと泉」で第12回ロシア・サンクトペテルブルク国際映画祭グランプリを受賞。国内外で高い評価を受けている。

山内光枝（やまうち てるえ）

美術家。映像、ドローイング、インスタレーション等による作品を手掛ける。イギリスでファインアートを学んだ後、出身地福岡に程近い海峡を拠点にする日韓の海女 の存在を知り、2013年には韓国済州島で海女学校を卒業。2015年、2016年と文化庁や国際交流基金の支援を得てフィリピンに滞在し、フィールドを海洋アジアに広げる。

対象となる土地や地域、そこで暮らす人々の生活現場に身を置き、自身の身体を通して得た経験や世界観を元に、歴史や記憶を現在に接続する作品を制作してきた。初の長編『つれ潮』が東京ドキュメンタリー映画祭2019で、奨励賞を受賞。近作『信号波』（2023）は、日本統治下の釜山に暮らした自身の家族史に向き合うセルフドキュメンタリー。

近年の主な展覧会に、「Something So Incredible」慶南道立美術館、昌原、韓国（2025）「日本パビリオン」光州ビエンナーレ、韓国（2024）、「泡ひとつよりうまれきし 山内光枝展」対馬博物館（2024）、「水のアジア」福岡アジア美術館、福岡（2023）、「Spinning East Asia SeriesⅡ: A Net (Dis)entangled」CHAT、香港(2022)がある。

笹久保伸（ささくぼ しん）

クラシックギターを学び、現代音楽とアンデス音楽の奏者としてペルー、ボリビア、アルゼンチン、チリ、キューバ、イタリア、ギリシャ、ブルガリアなどで演奏。2004-2008年 ペルーアンデスの農村で音楽を採集および研究、同時にペルーの人間国宝 Raul Garcia Zarateをはじめとする伝説的な音楽家たちからアンデス伝統スタイルのギター音楽を学ぶ。帰国後は自らのアイデンティティと向き合いアートコレクティブ『秩父前衛派』名義で活動し秩父で民俗調査や武甲山環境問題の取り組みをアーティストとしておこなう。

音楽、現代美術、映画、写真作品を発表し瀬戸内国際芸術祭、市原湖畔美術館、金沢21世紀美術館、山形国際ドキュメンタリー映画祭などで作品を発表。これまでに東京芸術大学、多摩美術大学、早稲田大学、立教大学、立命館大学、青山女子短期大学、東京医科歯科大学、和光大学で音楽・芸術・秩父論などの特別講義。作曲家のSylvano Bussotti、Carlo Domeniconi、高橋悠治、杉山洋一らの作品を世界初演。2025年現在までに44枚のアルバムをLP、CD、カセットテープでリリースしている。

山口勲（やまぐち いさお）

1937年、福岡県中間市生まれ。水巻高校卒業後、1957年から日炭高松炭礦で採炭夫や捲方、仕繰夫として働く。1965年、従軍カメラマンとしてヴェトナムへ渡り、戦火の中の民衆を取材。帰国後は日雇い労働者、会社員、運転手などの職をこなし、98年にヴェトナム再訪。2004年、初の写真展が開かれる。

山本作兵衛（やまもと さくべい）

福岡県嘉徳郡（現・飯塚市）に生まれる。8歳の時、一家で上三緒炭坑に移住し、やがて兄と共に炭坑の仕事を手伝うようになる。以後、様々な炭坑を転々として坑内で働き続けると同時に、幼い頃から仕事の合間に絵を描くことを好んだ。途中ペンキ屋や鍛冶工見習いの時期を挟むが、63歳になるまで継続して炭坑の仕事に携わる。1957年に炭坑の仕事を辞めて以降、炭坑を知らない世代へ記憶をつなぎたいという思いから、断続的に炭坑の記録画を描くようになり、上野英信や菊畑茂久馬らと交流した。

関連イベント

*各イベントの詳細はホームページをご確認ください。

*5回以上イベントにご参加いただいた方には、記念品をプレゼントいたします。

オープニングイベント

開幕を記念し、出品作家によるトークを行います。

日時 12月7日（日）10:30-11:30

会場 田川市美術館 展示室

参加費 無料（要観覧券*半券可）

月に一度どこかに現れる、衣食住遊とつながる場所。

「ツキ市」

人気のマルシェイベント「ツキ市」が美術館にやってきます。

日時 12月13日（土）11:00-15:00

会場 田川市美術館内

主催 ツキ市

出店情報などのお問い合わせは
instagram@tsuki.ichi のDMにて

笹久保伸ギターライブ

山内光枝+笹久保伸コラボレーション作品《底のない水 | Bottomless Serpent》に関連して、
笹久保伸によるギターライブを行います。

日時 12月20日（土）18:30-

会場 田川市美術館 アートホール

参加料 大人2,000円 高校生以下1,000円

定員 50名

*事前予約制、webもしくはお電話（0947-42-6161）でお申込みください。

石炭の火でつば焼き芋をつくってみよう

石炭で火をおこして、ほくほくの「つば焼き芋」をつくります！

石炭やお芋が登場する絵本の読み聞かせもあります。

日時 2026年1月12日（月・祝）13:30-

会場 田川市美術館 前庭（つば焼き芋づくり）、田川市立図書館（絵本の読み聞かせ）

参加料 無料

*読み聞かせ参加者には「おはなし会シール」をプレゼント。

*協力：田川市サツマイモプロジェクト、ラーメン げんてん

「LINKS—菊畑茂久馬」関連企画

全国展開している「LINKS—菊畑茂久馬」企画アドバイザーの山口洋三氏をお招きしてトークを行います。

日時 2026年1月24日（土）13:00-14:00

会場 田川市美術館 展示室

参加料 無料（要観覧券*半券可）

クロージングイベント

インディペンデント・キュレーターの原田真紀氏をお招きし、ギャラリートークを行います。

日時 2026年2月1日（日）13:00-14:00

会場 田川市美術館 展示室

参加料 無料（要観覧券*半券可）

『越境のアーティスト 富山妙子』出版記念 連続出張講座

『越境のアーティスト 富山妙子』の出版を記念し、連続講座を行います。

本講座は真鍋祐子氏のご提案により、東京大学東洋文化研究所真鍋研究室のご協力を賜り開催する運びとなりました。

日時 12月28日～1月25日までの毎週日曜日（全5回）
上映会 13:00-14:20
講座 14:30-15:30
会場 田川市美術館A Vホール
参加費 無料（要観覧券*半券可）
上映作品 『自由光州—1980年5月—』（25分、1981年）
『はじけ鳳仙花—わが筑豊 わが朝鮮—』（48分、1984年）

講座内容

第1回（12月28日）小松原時夫氏（聞き手 田村元彦氏）

「富山さんの『理不尽を見過ごしてはいけないわよね、表現者なら』との思いから始まった2本の映画について」

第2回（1月4日）徐潤雅氏

「東京から来た女性／画家——富山妙子と炭鉱」

第3回（1月11日）レベッカ・ジェニスン氏

「筑豊から世界へ：富山妙子の画家人生について」

第4回（1月18日）金子毅氏

「響き合い、すれ違うまなざし——富山妙子と上野英信・交流の軌跡」

第5回（1月25日）真鍋祐子氏

「〈光州〉から照射された〈筑豊〉の意味——“自分の存在を込めて語れるもの”として」

講師略歴

小松原時夫氏

1979年幻燈社に入社。東陽一監督の『四季・奈津子』『マノン』など制作部として参加。『自由光州—1980年5月—』では幻燈社代表である前田勝弘監督に言われ製作を初めてつとめる。1985年退社しフリーのプロデューサーとなる。1994年（株）モンタージュの設立に参画し、資料館や博覧会映像などを製作する。2021年から代表取締役社長に。プロデュース作品には『アレクセイと泉』『自転車で行こう』『炭鉱（ヤマ）に生きる』『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』『分子の音色 A scientist and a musician』などがある。

田村元彦氏

西南学院大学法学部准教授（政治学）。1969年和歌山県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒。同大学院博士課程修了。従軍慰安婦や戦後補償の問題などの市民運動に長く関わり、KBCシネマの企画ディレクターとして特にドキュメンタリー映画の上映企画を数多く手がける。

徐潤雅氏

大阪経済法科大学特別専任准教授。主な論文に「富山妙子における「新しい芸術」の模索—敗戦後から1960年代までを中心に」『東洋文化』第101号（東京大学東洋文化研究所、2021年）「富山妙子の目に映った韓国—《朝鮮風景》からスライド『倒れた者への祈禱』まで」『対抗文化史—冷戦期日本の表現と運動』（大阪大学出版会、2021年）など。

レベッカ・ジェニスン氏

1949年、米国生まれ。京都精華大学人文学部名誉教授。専門はジェンダー論、現代美術・文学論。
1980年代より富山妙子の作品に魅せられ、火種工房のサポーターとなった。2002年に京都精華大学ギャラリーフロールで「巫女ときつね：富山妙子展」を開催してから、国内外の富山妙子展にも協力した。主な著書に、『Imagination without Borders: Feminist Artist Tomiyama Taeko and Social Responsibility』（ローラ・ハインと共編、2010年）がある。

金子毅氏

1962年、埼玉県生まれ。聖学院大学教授。専門は文化人類学（経営人類学を含む）、民俗学。
主な著書に、『八幡製鉄所・職工たちの社会誌』（草風館、2003年）、『「安全第一」の社会史—比較文化論的アプローチ』（社会評論社、2011年）、『現代民俗誌の地平1 越境』（共著、朝倉書店、2003年）、『会社の中の宗教』（共著、東方出版、2009年）、『産業安全活動 二つの源流「Think Safety First again」—100年の時空を超えて』（共著、化学工業日報社、2016年）などがある。また、『「安全第一」をめぐる日本文化論的研究—「Safety-First」と「安全第一」のあいだ』（乙種・博士学位論文、九州大学大学院人間環境学府、2010年）、『淡路・富山妙子「解放」の原点—縄騒動、そして人形芝居』（『東洋文化』第101号、2021年）、『上野英信・制度を呪詛した男—世界を透視する闇のまなざし—』（『聖学院大学論叢』第37巻第2号、2025年）、『闇の語り部の誕生—画家・富山妙子が見た上野英信—』（『聖学院大学論叢』第38巻第1号、2025年）などの論文がある。

真鍋祐子氏

1963年、北九州市生まれ。筑波大学大学院修了、博士（社会学）。東京大学東洋文化研究所教授。専門は朝鮮地域研究。
著書に『烈士の誕生—韓国の民衆運動における「恨」の力学』（平河出版社、1997年）、『増補 光州事件で読む現代韓国』（平凡社、2010年）、『自閉症者の魂の軌跡—東アジアの「余白」を生きる』（青灯社、2014年）、『思想・文化空間としての日韓関係—東アジアから考える』（共著、明石書店、2021年）、訳書に『恨の人類学』（崔吉城著、平河出版社、1994年）、『韓国인권紀行—私たちには記憶すべきことがある』（朴來群著、高文研、2022年）、論文に「越境する画家・富山妙子の人生と作品世界—ポストコロニアリズムとフェミニズムの交点から」（『民主主義と人権』21-1、2021年：韓国語）など。

サテライト会場

田川市内にある廃校を利活用している施設「いいかねPalette」をサテライト会場として、アーティストユニット「DIGDUG」（母里聖徳＋長野聡史）、株式会社BOOKとNPO法人アーツトンネルのメンバーを中心に、地域とつながるイベントを開催します。

●サテライト展示

地域の自然や歴史をテーマにしたリサーチプロジェクトの記録や、アーティストによる関連作品を展示します。

会場：いいかねPalette理科室（福岡県田川市猪国2559（旧猪位金小学校））

展示期間：

11月中旬～ オープンスタジオ

12/7（日）～ 本展示（入場料200円）

●リサーチプロジェクト

参加者と一緒に、地域の自然や遺跡などをめぐり、歴史を調べるフィールドワークを行います。

実施日：12/8（月）、12/27（土）、1/23（金）、1/26（月）

時間：各回9：00～15：00 *時間は多少前後する可能性がありますのでご了承ください。

参加料：1,500円

*事前予約制です。

会場までのアクセス

田川後藤寺駅から 車またはコミュニティバス（平日のみ）で10分

田川伊田駅から 日田彦山線池尻駅下車 徒歩35分



画像請求フォーム

メール送信先 museum@tagawa-art.jp

FAX 050-3385-0499 田川市美術館 広報担当行

本展の取材・告知を目的とした広報用画像をご希望される場合は、以下の画像請求フォームよりお申込みください。画像はデータでご提供いたします。希望される画像にチェックをいれ、媒体名、御社名、ご担当者、ご連絡先などをご記入の上、本用紙をメールまたはFAXでお送りください。

この画像を希望 ☐ 1



大洲大作
《光のシークエンスー筑豊》より
船尾駅-田川後藤寺駅
2024年

この画像を希望 ☐ 2



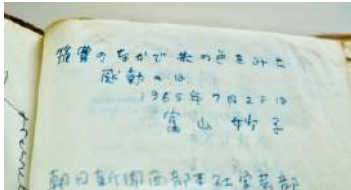
中尾美園
《紅と白（仮題）》
2025年

この画像を希望 ☐ 3



富山妙子
《炭鉱でのドーイング：1950年代》
個人蔵
©Tomiya TAEKO

この画像を希望 ☐ 4



「王塚古墳見学者名簿
(1948年～1965年)」
2021年6月
撮影者：金利明
王塚装飾古墳館蔵

この画像を希望 ☐ 5



山内光枝+笹久保伸
《底のない水》
| Bottomless Serpent
2022年

この画像を希望 ☐ 6



山口勲
《水浸しの炭住街》
1959年
日炭高松

この画像を希望 ☐ 7



「山本作兵衛作品模写壁画
制作の様子」
1970年
四谷美学校スタジオ
今泉省彦氏提供

媒体名 _____
御社名 _____
御担当者名 _____
所在地 _____
電話 _____
メールアドレス（データ送付先）_____